新潟医福誌６（１）158・161

医療福祉ティームワーク論の概要

遠藤和男

キーワード：チームワーク、グループワーク、KJ法、

The Summary of the practice for teamwork between medical and welfare field

Kazuo Endoh,MD,DMSc

Keyword : Teamwork, Group Work, KJ Method

１．基礎ゼミⅡと医療福祉ティームワーク論との関係

平成13年度後期から16年度まで、旧カリキュラムの医療福祉基礎科目群の１つとして、「医療福祉ティームワーク論（以下ＴＷ論という）」を担当した。開学前にこんな科目を考えているのであるが、ほかに適任者を知らないので、仮に内容を考えてほしいと言われ、ついには担当することになってしまった。ただし、準必修である「基礎ゼミⅡ」では５学科すべての学生がそろうわけであり、チームワーク（科目名は「ティーム」であるものの、日本語としてはチームの方が一般的）を仮体験するには、基礎ゼミⅡの方が望ましいことを、準備室の高橋榮明先生にファクスで意見具申した。

その後多少の紆余曲折があったものの、基礎ゼミⅡの第１回目は湧井、山手両学部長の講話として、第３～６回目まで、計４コマを遠藤の企画に任せてもらった。したがって、本来のＴＷ論については補完的に、せいぜい40～50人くらいを６～７グループに分けて、シラバスに書いたとおり、症例検討を４コマ、目標設定を２コマとして討論を行えばよいと考えていた。ＴＷ論の第１回目では、多田羅浩三氏の「医療福祉の概念」[1]を基に講義し、基礎ゼミⅡの中でＴＷ論に関することを４コマ実施するので、あえてＴＷ論を履修する必要がないことを強調した。

ところが講義が終わった直後に学生から、学科によっては医療福祉基礎科目群の選択範囲が非常に狭く、「ＴＷ論を履修しないと卒業用件を満たさない可能性がある。」と言われた。また前期に「医学概論」も２コマ担当した経験から、学生の医学的知識はまだまだであり、とても症例検討をメインにはできないと感じた。ＴＷ論についてはおよそ130人の履修が予想されるとともに、専門的な知識を基にした討議は無理であるため、内容の再検討が必要であった。すなわち後期の始めに、基礎ゼミ４コマとＴＷ論の双方を企画するという、いわば二重苦を背負わされることとなった。

まず、基礎ゼミⅡの内容を以下に示す（○番号はＴＷ論としての回数）。

・**第２回目：他己紹介**、２人でペア（奇数グループの場合は教員も加わる）となり、インタビューの結果を披露する。特に共通点を見つけるようにするとよい。

※共通の導入部分として、ＴＷ論の４コマ以外に遠藤が企画した。

・**第３回目①：職種紹介**、医師、歯科医師、看護師・准看護師及び５科６種以外の医療・福祉関係職種について、ペアやトリオで話しあい、名称、国家資格かどうか及び業務内容を検討する。「国民衛生の動向」に掲載された医療関係者の一覧表も追加配布して、最後に他のペアやトリオが採点する。

遠藤和男　新潟医療福祉大学　医療技術学部　健康栄養学科

［連絡先］〒950-3198　新潟市島見町1398番地
TEL・FAX：025-257-4420
E-mail：endo@nuhw.ac.jp

・**第４回目②：職種についての討論と自己目標の設定について**、「AERA Mook」[2] 各職種のコピー及び「2002 CAMPUS GUIDE」[3] を持参してもらう。中規模の教室で各学科の学生を集め、社会福祉学科学生は２グループとする。自分の学科の特徴、「AERA Mook」の先輩を見てどう感じたか？、自己目標等について討論する。伍桃祭の際に自分の学科を紹介できることをねらいとした。

・**第５回目③：ＮＡＳＡゲーム**、コンセンサス・ゲームの一つであり、グループワークの効力を実感できる。後半は第４回目で時間がなかった、自己目標についてグループ内で発表してもらった。他学科の特徴の理解もねらいとした。

・**第６回目④：チームワークの場面について**、まず医師や看護職と自分とのこれまでの経験について話してもらい、次にペアやトリオを形成して、連携できる場面や症例などについて考える。インターネットや図書館の利用も可能とする。

なお、学科全体で患者さんやクライアントになったつもりでロール・プレイを行った学科もあった。

なお、ＮＡＳＡゲームは、医学教育ワークショップなどでも ice breaking の手法として広く用いられ、昨年、今年のＦＤの活動の中でゼミⅡの導入として紹介した。

第７回目は、いわゆる「里帰り」であり、ゼミⅠの担任の元に帰るという方式であった。

以上、14 コマのうち前半７コマを使った格好となり、ゼミⅡのもう一つの目標である研究テーマの追求とまとめが疎かとなったため、２年目からは後者を主体とせざるを得なかったというのが実情である。

２．医療福祉ティームワーク論の構成

前述したように基礎ゼミⅡとＴＷ論は平行して実施され、準備不足のため第２回目も講義とせざるを得なかったので、施行されたばかりの「介護保険法」について解説した。またＴＷ論の進行状況を知らせするため、ゼミⅡの「進め方４」として、第６回目の前に全教員に配布した内容の一部を示した。なお、以下Ｇはグループ、ＧＷはグループワークをさす。

・**第１回**：多田羅浩三著「医療福祉の概念」についての講義（前述）

・**第２回**：「介護保険制度の概要」についての講義（「国民福祉の動向」などから）

・**第３回**：ＧＷ「あなたの一番大切なものはな～に？」；合意形成ゲーム

☞ かなり好評だったので、ゼミⅡで第５回目でＮＡＳＡゲームを導入した。

・**第４回**：ＧＷ「老人保健・医療・福祉の問題点」；ＫＪ（川喜多二郎）法

☞ チームワークについて３／18 Ｇが問題点として挙げてくれた。

・**第５回**：ＧＷ「問題解決のための二次元展開法」；第４回目の問題点が材料とする。

・**第６回**：ＧＷ「患者さんと専門職との対話」；ロール・プレイ（本来ゼミⅡ第６回目）

・**第７回**：ＧＷ「ケース・スタディ」を考えたいと思いますが、詳細は未定です。

既にＴＷ論の履修希望者は確定していたので、７－８人ずつ×６Ｇ×３教室で実施した。もちろん遠藤１人では担当できないので、健康栄養学科の助手さん２名（後に各学科１名ずつ）の応援を得て、遠藤は各教室を随時巡回する方式をとった。

第３回目の合意形成ゲームは、前述のＮＡＳＡゲームと同様、「新グループワーク・トレーニング」[4] に掲載されており、人生で愛、健康、富、名声など何が重要かをまず個人で考え、次にＧで意思決定するものである。出席の代わりにＡ４用紙に個人の決定のほか、下方にいわゆる振り返りや感想を書いてもらった。残念ながら次の回に返却したので、現物は手元に残っていないものの、「初めて大学生らしい講義を受けた」、「価値観は人によって違うと思った」、「いろんな人の意見を聞けてよかった」、「この形式を続けてほしい」など、ほとんど全員が肯定的であり、今後もＧＷを主体とする自信を得ることができた。

ただし、第５回目の二次元展開法では、学生の人生経験の乏しさや、高校時代に問題解決型思考法を教わってこなかったためか？、時間が来てもいい案が浮かばず、だらだらとあらぬ方向の会話に陥ってしまった。そこで第６、７回目のロール・プレイやケース・スタディを断念した。軟弱路線？に切り替えて、第６回目に「合格者推理ゲーム」[4] を採り入れて、コミュニケーションの重要性を再認識させるようにした。

また、最終的に受講者に評点をつけなければいけないことから、第７回目は「医療・福祉におけるチームワークの問題点」について、第４回と同様にＫＪ法[5] を再び実施し、第５回目と同様の二次元展開法での問題解決をレポートとした。そもそもチームワークについて評価するためには、いわゆる観察評価しかないわけであるが、しかしたとえ遠藤がＧＷの様子を巡回して観察しても、一場面の評価にすぎないため、次善の方法としてレポー

トを採用した次第である。

３．二年目からのＴＷ論の構成

２年目以降は、ゼミⅡの中にＴＷ論のコマを入れてもらうことを断念した。１年目の途中に変更した点を踏襲して、以下のようなスタイルに落ち着き、平成16年まで実施した。しかし、固定化されることはマンネリ化につながるものであると、現在では改良点があったのにと反省される。

第１回：職種紹介ゲーム、Ｈ13年度基礎ゼミⅡ**第３回目**①の内容。この回だけ大講堂でとなりの２－３人（同じ学科でも可とする）で、コメディカルスタッフについて話し合い、用紙を交換して採点する。今後の希望についてアンケートを実施。

第２回：自職種の特徴と他職種との関わりについて（大学祭を直前にして）、Ｈ13年ゼミⅡ**第４回目**②の内容とほぼ同じ、各学科毎に小・中教室を指定する。

※アンケートと履修登録を基に各学科混成のチームを割り付け、第３回目前に掲示。

第３回：討論ゲームＧＷ「人生大切な物ってなぁ～に」、初年度のとおり。

第４回：ＫＪ法による老人保健・医療・福祉の問題点：ＧＷ、初年度のとおり。

第５回：二次元尺度法についてＧＷ、第４回目の問題解決策、初年度のとおり。

第６回：コミュニケーションゲーム「合格者推理」、前述のとおり当初案を変更

第７回：医療福祉のチームワークについての問題点、前述のとおり当初案を変更

２年目からは、いわゆるお試し受講は１回だけになったものの、受講生はなかなか確定しなかったため、例年チームの割り付けに頭をなやますことになる。しかも、第３回目のあと取り消しがあったり、第３回目から参加希望があったりと、第４回目くらいまでチームが固定しなかった。またチームワークを強調しても遅刻や欠席などの問題もあり、最終のＨ16年度には、とうとうチームを変えてほしいという学生まで現れた次第である。

４．ＴＷ論受講の実績と評価

今残されている試験成績表を基に受講者の人数を列記すると、Ｈ13年度は143名、Ｈ14年度155名、Ｈ15年度226名、Ｈ16年度197名と、年々歩留まり率は低下し、特にＨ16年度は取り消しが多かったと記憶している。最近の学生の受講態度を見ると、だんだん受身一方の学生が増えてきており、私が年々改革する努力を怠ったためばかりとは言えないように思われる。

なお、わずか７コマの授業ながら、また必須ではなかったものの、平成16年度に実施した授業評価結果を以下に掲載する。なお回答者は192名であった。

１．内容を分かり易くする工夫がなされていた	評定平均 3.47
２．授業の進行速度が内容を理解するのに適切であった	3.34
３．授業ごとのポイントは明確であった	3.71
４．板書スライドなどが読みやしかった（見やすかった）	3.43
※ほとんど板書しなかったので，資料がわかりやすかったと読み替える。	
５．話し方が聞き取りやすかった（Ｈ16は各学科助手さんも加わる）	3.52
６．教え方がわかりやすかった（遠藤は巡回していく）	3.34
７．授業の内容が理解できた	3.79
８．グループワークの方が講義より受けやすかった	4.15
９．１年生より２年生の方が受けやすいと思う	3.31
10．この授業の総合評価は：	3.89
11．この授業への出席は次の通り：	4.80
12．積極的にグループワークに参加し，皆と協力できた	4.64

またＴＷ論は通常講義ではなく、すべて演習とも言いがたいため、必ずしも適切な評価内容ではなかったかと思われる。ただし、「９．１年生より２年生の方が受けやすいと思う」については、５及び４が42.1％と予想外により低かった。

５．その他の連携科目とその後

ＴＷ論は新カリキュラムの２年生科目として、「医療福祉コミュニケーション論」（丸田先生担当）と「医療福祉連携論」（矢谷、柴山先生担当）とに分かれた。両教科のこれからの成果に期待したい。１期生の同期会に出席した時、卒業生からいわゆる共通科目で印象の残っている教科は、原教授（現、事業創造大学院大学研究科長）の「消費と経済」とＴＷ論くらいなものであると言われた。

前者については新カリでも残っているため、昨年からＦＤ委員会として授業公開を依頼し、幸いにも快諾が得られた。授業参観前にお聞きした工夫の中で、最も関心したのは大講堂やGA101などの大教室で、６人くらいのＧＷを課していることと、２回もＧを交替させている

ことであった。私もG分けには苦労したので、そのことを伺うと、むしろ楽しんでおられるようであった。今年は看護学科の先生方の参加が多かったものの、もっと多くの先生方から、いわゆる共通科目の授業公開に参加して欲しいと思う。特にリベラル・アーツなどと、教養教育の重視が叫ばれている中、自学科の学生がどのような科目を受講しているのかは、専門教育につなげる上でも、大いに参考になるはずである。

なお、私が個人的に関与していた教養科目としては、ほかに「公衆衛生学」7コマと「医療と福祉の法」8コマ（＋丸田先生6コマ）があった。前者は今年度から、新潟リハ病院兼務の本間先生にお願いしている。後者については、ほかに関連教科がない（社会福祉士に必要な「法学」とはまったく異なり、実用的な法律についての解説）ため、学生の知識不足が見られることを丸田先生からお聞きした。

今や、前期は「統計学」（ただし、旧医療技術学部の4学科については「保健統計学」として教えている）で手一杯であり、とても全学科共通科目を持つ余裕はなくなった。ただし特に1、2期生で私を知らない者は、モグリとは言わないまでも、学生時代余り出席の良くなかったと思われるし、現4年生からも時々「お久しぶりです」などと声がかかる。

反面、現3年生以下では、「医療統計学」、「同演習」や基礎ゼミⅡで担当した学生以外、学年や学科の区別がつかない状態にあり、だんだん存在感の薄くなるのは、髪の毛と一緒で淋しい限りである。

参考文献

1）多田羅浩三：医療福祉の概念，日本医師会雑誌「医療の基本ＡＢＣ」pp228-231, 2000.
2）朝日新聞社編：AERA Mook「医療福祉がわかる本」，朝日新聞社（東京），2001.
3）新潟医療福祉大学広報委員会編：2002 CAMPUS GUIDE, 同会（新潟），2001.
4）日本レクリエーション協会編：新グループワーク・トレーニング，遊戯社（東京），1995.
5）川喜多二郎：発想法－創造性開発のために，中公新書 136, 1967.